

和光新校準備委員会（第2回） 議事録

- 1 日 時 令和5年6月8日（木） 午前10時開会
午前11時30分終了
- 2 会 場 県立和光国際高等学校大会議室
- 3 出席委員 依田委員長、鈴木副委員長、柴崎副委員長、中川委員、辻委員、
羽田委員、佐藤委員、山口委員、布川委員、重田委員、廣川委員
- 4 事務局 魅力ある高校づくり課 栗藤、中島、坂本、高辻、橋本
- 5 協 議 「和光新校基本計画骨子（案）」について
依田委員長 協議に入っていきたいと思います。資料の1「基本計画骨子（案）」を御覧いただきたいと思います。この資料1について、事務局から説明をしていただきますが、そちらについて御意見をいただきたいと思います。長いので、まず1ページから事務局に説明を求めます。
事務局 （和光新校基本計画骨子（案）のうち課程・学科等、学校規模について説明）
依田委員長 それでは、事務局から説明のありました、特に学科名と学級の数について委員の皆様から御意見をいただきたいと思います。
重田委員 クラス数ですが、この建物で十分いけるということでしょうか。
依田委員長 では、事務局よりお願いします。
事務局 原案の8クラスというのは、現在の和光国際高校における1学年当たりの生徒数と同じとなっています。よって、十分に記載したクラスの規模を維持できると考えています。
依田委員長 他にありますか。
佐藤委員 現時点で和光国際高校が普通科6学級、外国語科2学級の計8学級で、和光高校は普通科4学級、計12学級ある中で、令和8年度の新校における原案の6学級、2学級、計8学級というのは生徒数の変動に伴って、減少率的に適正なのか伺います。
依田委員長 事務局よりお願いします。
事務局 高等学校の場合は学区がありませんので、広いエリアで検討していくこととなります。県全体としても15歳人口が減ってきているということもありますので、今回の場合は、そうした減少傾向を踏まえて、単純に2校を足した学級規模ではなく、現在ある和光国際高校のサイズに2校を1校に統合するという流れになっております。
依田委員長 佐藤委員よろしいでしょうか。では、羽田委員お願いします。

羽田委員 学科の名称についてですが、国際科というシンプルな名称となっていますが、近隣の東京都や神奈川県などに同じ名称の学科はあるのでしょうか。要するに、似たような名称であると紛れてしまって、新規性が感じられないのではないかと考えました。

事務局 東京都の国際教育におけるフラッグシップ的な学校として東京都立国際高校がありますが、そちらも、同じく国際科となっております。神奈川県には神奈川県立横浜国際高校がありますが、こちら実質、県の国際教育を担う中心校ですが、こちら国際科という名称になっています。国際科という名称が全国的に見てもが一番多いです。今回の場合、国際に関する学科を設置する新校が他に2校ありますが、そういった中の中心校、拠点校とこちらの新校はうたっておりますので、しにせ的な名称として、いくつかの学校と重なるわけですが、埼玉県としては初の国際科と考えました。

依田委員長 よろしいですか。他はいかがでしょう。一通り終わった後、全体を通して御意見を伺うようにしますので、先に進ませていただきたいと思います。それでは、資料1の1ページに戻っていただきまして、基本理念の部分、こちらを御覧いただきながら、事務局の説明をお願いしたいと思います。

事務局 (和光新校基本計画骨子(案)のうち基本理念(目指す学校、育てたい生徒像)について説明)

依田委員長 それでは、基本理念の部分について委員から御意見をいただきたいと思います。何かございますか。では、羽田委員お願いします。

羽田委員 印象論になって恐縮ですが、目指す学校を拝見して、これから新しい学校を作っていくという、しかも複雑化が進むこの世の中で活躍できる人材を育てていく学校なのだという、そうした新しさや革新的とか、そういうイメージが余り感じられないのですよ。要するに何年か前に同じフレーズで出しても通用するような感じがします。けなすわけではないのですが、いろいろな地域でいろいろなことが起きている、そういうものを捉えながら、そういう社会で生きていく子供たちを育てていくのだという、もっと一歩あるいは半歩踏み出した表現になっても良いのではないかなと思っています。例えば、チャレンジするということで、国際ということであれば、開拓者精神のようなフレーズとか。あるいは、どんどん世の中は多様化していますよね。国内も多様化していますし、国籍とかも含めて、いろいろな価値観が多様化しています。そういう多様化している中で自分をしっかり表現していくということもアピールしても良いのではないかなと。目指す学校イデ、自国の伝統、文化を理解するとともに、とありますが、理解というとすごく受け身に私は思ってしまう。もっと、発信していくとかですね、国際感覚を身に付けて、グローバルリーダーになって活躍する人材を輩出するという、それくらいのことを言っても良いのではないかなと思いました。参考資料を拝見しても、そういうイメージで両校ともいらっしゃるのではないかなと感じました。

依田委員長 いかがでしょう事務局からは。

事務局 私たちとしても抜けているとは思っていないのですが、表現的に抑え気味に

なっているのかもしれませんが、勇気をいただいたようなところがあります。今回お示ししているのは骨子案であり、これからの作業で文章化していくことになるのですが、御意見をうまく反映していけたらと考えています。

依田委員長 ありがとうございます。その他いかがでしょう。

羽田委員 もう1点良いですか。目指す学校のAに教養力とあるが、教養は、力とくっつくものなのかなと素朴に感じました。教養というのは、素養として身に付けるものではないかなという理解をしまして、能力として力に位置付けて、出来た・出来ないと判断する、この組合せが私には違和感があります。これは恐らく、地域の方や卒業生、これから入学してくる中学生や保護者にも広がると思っていて、そうした人たちが見た際に、新校に行くとういう力が付くのだね、こういうところを伸ばすのだねと。共生や人間という力は、いろいろなところで使われているのでイメージしやすいと思いますが、教養力についてはよく分かりませんでした。

依田委員長 教養力についていかがでしょう。

事務局 原案を出している学校で長らく使われてきた言葉であり、それをそのまま使わせていただいています。これは和光国際高校の案から使わせていただいているので、校長としてどんな形のイメージか御説明いただけると有り難いです。

依田委員長 いかがでしょうか。

鈴木副委員長 参考資料1の2ページ「育てたい生徒像」の和光国際高校案に3つの力について記載があり、この表現は学校案内等でも掲載しているのですが、2つ前の伊藤校長のときにスクールアイデンティティとして作られたものです。教養力という表現についての羽田委員の違和感がよく分かるのですが、そこに書いてあるとおり「単なる知識だけではなく自分の考えをしっかり持って伝える力」という意味が根底にあります。それを私も引き継いで生徒には常に、自分の意見をしっかり持って発信する力という話をしています。

依田委員長 いわゆる造語ということですね。この点については基本計画を作成する際に学校と事務局で調整していただきながら、造語を解説まで入れて使うのかどうかということかもしれませんね。

事務局 細かい話になりますが、骨子案を作成する際に事務局で一つだけ考慮したことがあります。どの新校においても、現在のどちらかの学校が持っている校訓は直接使わないようにしていました。あくまで2校が統合されるので、どちらかの学校に揃えるということはどうなのかなと。ただし、その学校で考えられてきたこと、カチッと決まったものではなく、例えば和光国際高校でこういう教育をやりたいということで書かれていたものなので、こちらについては記載してみたのですが、いわゆる校訓のようなものを、どの新校でもどちらかを記載するということはしないようにしています。

依田委員長 それでは、その他御意見があればいただきたいと思いますが、よろしければ2ページ目に進めさせていただきます。それでは、基本姿勢と教科指導、こちらについて事務局より説明をお願いします。

事務局 (和光新校基本計画骨子(案)のうち基本姿勢、教科指導について説明)

依田委員長 それでは、2ページの部分ですね。委員から御意見をいただければと思います。いかがでしょうか。重田委員お願いします。

重田委員 ここで出てくるのが国際的なのというか、国際感覚を身に付けとか出てくるのですが、もっと大きな地球規模の環境を守るとか、今、SDGsという言葉が言われていますけれど、やはりこれから一番大事なのは、世界に目を向けることと共に、地球に目を向けることが一番重要だと思います。そういう感覚の取組があっても良いのではないかと思います。

依田委員長 それでは事務局の考え方を伺いたいと思います。

事務局 御意見ありがとうございます。グローバルという観点が大事だということは、そうだろうと思っているところです。もしかすると、そうした言葉の打ち出しが欠けているのかもしれませんが。御意見をいただいておりますので、うまく反映させていければと思います。

依田委員長 お願いします。他に御意見はいかがでしょう。

羽田委員 基本方針の、地球規模の課題の探究活動を通して、ということで、私も先ほどのSDGsを題材として取り入れる、意識するということは賛成なのですが、何を探究活動で扱うかという素材を並べてみることも大事なのですが、どのように探究活動を進めていくのか、というところに触れても良いのではないのでしょうか。今、例えば、日本だけで何か問題が解決するということはほぼないと思っております。そうしたものを生徒たちに考えさせるとなると、自分だけ、あるいは和光新校の生徒だけで何か考えるということではなく、異なる他者とコラボレーションしながら、探究していくという過程が必要なのかと思います。異質な他者と意見を交わすという過程が探究活動においては重要になってきます。そのため、協働という言葉、協働型の探究活動、協働的な探究活動といった文言を、入れろというわけではないのですが、そういう観点を踏まえて探究を考えていくと、こういうものをこんなふうには探究していきます、というのがきれいに見えるかなと思いました。

依田委員長 事務局の考え方はいかがでしょう。

事務局 全くそのとおりだなと思っていて、確かに、どのようにという視点が表現には少ないのかなと思っています。この先、教育課程等も検討していくわけですが、やはり、それに向かう前に、こういう探究的な学びをしていきたい、探究的な学習ということでは、こういうやり方をしていきたい、ということはしっかりうたうべきかと思います。私たちがイメージしていた探究的な学びはまさに羽田委員がおっしゃっていただいたようなことなので、言葉が足りていないのだと感じております。

鈴木副委員長 言葉をどうするかというお話は難しいのですが、現状、本校ではここに記載されていることは、全てやっている感じで。例えば、先ほどお話のあったSDGsの観点は必ず盛り込み、相当定着して生徒も分かっています。例えば、シンガポールへの修学旅行が4年ぶりに復活するのですが、1年を通して探究活動をします。テーマは生徒自身が決めて良いのですが、1つ条件があって、SDGsの観点を必ず入れて研究するようにと。例えば、シンガポールというとグルメがあり、生徒たちも興味を持ちますが、グルメも良いけど、SDGsの観点でグルメを探究

するように言うと生徒は分かります。ただ、美味しいとか珍しいとかの話にはならない。SDGsの観点というのは、本校では定着しておりますので、入れるか入れないか別にして、地球環境や地球規模の課題を、基本計画に入れても良いかなと思います。教科横断的な学びもここ数年で進んでいまして、今年は具体的にグローバルイシューズという科目で、物理と地理で、実際に教科横断で授業を進めています。そういう意味では、新校になってもばっちり対応できるかなと思っています。

依田委員長 はい。それでは2ページ目はよろしいでしょうか。それでは3ページ目を御覧ください。生徒指導についてです。こちらを御覧いただきながら、事務局からの説明をお願いします。

事務局 (和光新校基本計画骨子(案)のうち生徒指導について説明)

依田委員長 それでは、こちらの部分につきまして御意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。よろしければ、全体を通しての御意見のところ、何かあればお聞きしたいと思います。それでは4ページ目に進ませていただきたいと思います。進路指導についてです。また、事務局からお願いします。

事務局 (和光新校基本計画骨子(案)のうち進路指導について説明)

依田委員長 はい。それでは進路指導について、委員の皆様から御意見いただきたいと思います。では、羽田委員をお願いします。

羽田委員 具現化のイのところですが、大学や外部機関ですか。学部機関となっておりますが。

事務局 外部機関の誤りです。大変失礼しました。

羽田委員 外部機関という表記が、広すぎないでしょうか。要するに学校と外の機関全部ということになるので、いろいろなものがここには含まれるということだと捉えられるのですが、それゆえにぼやっとしてしまっています。生徒たちの進路指導を行うに当たって、具体的にどこと連携を密に図っていく方向性なのでしょうか。

依田委員長 外部機関はどういったところをイメージした表現ですか。

事務局 先ほど、鈴木副委員長からもお話がありましたが、現在の和光国際高校も和光高校も、地域とのつながりであるとか、学校以外のリソースを活用した学びが実際に行われていると思います。こういったところを更に発展させていくというイメージですので、新規でゼロからスタートさせるという意味とは違うのですが。和光国際高校の案に、外部機関が提供するツールというのがありまして、それが現在行われているということなので、それを引いているところです。この辺りは、例えば教育情報系の企業やツールをおっしゃっているのかなと理解してここには記載があります。もう少し踏み込んで言うと、動画で学びをフォローアップしていくようなツールが含まれているのかなと理解しています。

依田委員長 羽田委員。これは具体的な標記を。

羽田委員 いえ、そこまで求めているわけではないのですが。要するに、生徒たちをどんな方向に送り出していくのだろうかというところが読み取れば良いかなと思って。学校全体でグローバルとか国際とか、そういう方向付けを出されるということですので、単に日本の大学の偏差値を意識して進学率を上げるということでは

ないですよ、というのが読み取れると、非常に新しい、しかも、この学校に行ってみたくてという生徒も増えるのではないかなと。やはり、大学進学率、合格率を上げるのだというわけではないような打ち出しがあると良いかなと思っていて、そうすると、例えば国際機関とか、政府の関係機関とか、すぐには思いつきませんが、具体的には別として、もっとグローバルや国際が匂ってくるような機関を入れておくと、そういうところにフィールドワークで行って、将来国連で働きたいとか海外でボランティア活動したいとか、地域で外国の方とうまくコミュニケーションを取るような仕事がしたいとか、そういうものに広がってけると良いかなと。単に大学受験だけではないですよということが必要かなと思っています。

依田委員長 はい。

事務局 私たちもそういった感覚を持って記載をしてきているところですが、もう1点、先ほど誤った説明をしてしまったのですが、学部機関というのは、和光国際高校案の原文ママでして、大学の学部と連携した取組を和光国際高校で実際にやられているということですので、私が即座に外部機関の誤りです、と言ってしまったのですが、基本的には学部機関のままイキをお願いをしたいと思います。申し訳ありません。あくまでも骨子案ですので、羽田委員からいただいたような意見も頂戴できれば、最終的な案に仕上げる際には文言を整理していきたいと思っています。国際機関などでは、私どもでも昨年辺りから連携ができないかということで、例えばJICAなどにコンタクトして、今後の新たな学びといったところを聴取し、埼玉県教育委員会がJICAと連携していることもありますので、そうした機関なども有力な候補かなと考えていますが、ここでは直接的な名称としての記載は避けています。

羽田委員 大学や学部機関だと大学オンリーになってしまいませんか。すごく狭くなってしまいう気がして、もう少し広げた方が良いのかなと思います。学部機関とは余り聞かないのですが。

鈴木副委員長 学部機関については、和光国際高校が原案を出しているのでしょうか。

事務局 そうです。

鈴木副委員長 この言葉が変であれば変えていただいて構わないです。学部機関という表現にこだわってはいませんので。

事務局 上智大学文学部の言語教育研究センターなどを指しているのではないですか。

鈴木副委員長 上智大学の学事センターとは連携しているので、そういったところで学部機関としているのかもしれませんが。外部機関については、現在実際に連携しているのは理化学研究所があり、3年の探究の時間に実際見学しに行ったり講義を受けさせたりしていただいています。最先端の研究を。これは普通科の理系です。それから先ほどお話のあったJICAについては、私自身も2年間JICAにいたので、昨年度から教材開発で連携しています。今年度は昨年退職された審議役の方とつながり、先日学校にもお越しいただき、秋の講演会をしていただきます。これは完全に進路指導です。キャリアとして国際協力がどう位置付けられるのか、40年間研究されてきた専門家なので、そういった方に今年講演いただくことになっていま

す。JICAとのつながりは確実に深まっておりまして、その点は自信を持って言えますが。気になる表現があれば教えていただければ。

依田委員長 羽田委員よろしいですか。他に御意見ありますでしょうか。重田委員お願いします。

重田委員 具現化を見ていると、ほとんど進学をベースに考えているものだと思います。前回伺った際に、和光国際高校は進学率が8割以上、和光高校は50%以下ということですね。これを見ていると、就職というものに対する進路指導がほとんど出ていないですね。まず、学校を出たら就職をするという子が、50%くらい今の和光高校にはいる。あるいは専門学校に行って、次の就職に向かうというものがあると思うのですが。これを見ている限りでは、新校は今の和光高校レベルの生徒は受験しないというふうに見えるのですが、その辺りはいかがでしょうか。

依田委員長 はい。学校の性格的な部分の話になると思います。

事務局 私たちの学校の再編では、2つの学校を統合するという考え方を示させていただいて、どちらかの学校が歴史を止めてしまうということは考えていません。今回も、校舎は閉じることになりますが、和光高校は新校の歴史の一部になるという考え方であるところです。その一方で、中学生が学校を選ぶというときに、学力選抜という高校入試がありますので、それを経て入ってくるということは、必ずどの学校でも必要になってきます。そのときに、県教委として、例えば新校を、こういうようなスコアの子供たちが入る学校と設定することや決めることは難しいと考えています。あくまでも地域の中学生がその学校を志願し、その結果としてどういう生徒たちが入学するかということになるのかなと思っています。和光新校の実施方策などに書かれていることは、現在の和光国際高校の学びに近いところは確かにあるのですが、私たちとしてはあくまで和光新校として生徒募集を行って、その結果、地域の中学生が学校を選ぶということなので、難易度としてこの辺りを設定するというのは教育委員会としてもなかなか難しいと考えています。答えになっていないかもしれませんが。

重田委員 であれば、最初からここにそういうことを入れておいても良いのではないですか。就職をする生徒もいるということベースにした記載を。この内容だと、今御説明があったことを感じ取れないですね。だから結局は、最終的には和光国際高校になってしまうのではないかという感じですね。前回も非常に良い意見があって、生徒を個別指導して、育てていく和光高校の良さとお聞きしましたが、そういうところが欠けているように私は感じています。

依田委員長 基本方針でやはり、職業観の育成であるとか、高校を出てすぐ仕事をする、大学を出て仕事をする、また、様々な経験を持って仕事をし、いずれにしても職業観の育成であるとか、職業人の育成という観点、重田委員が仰せになられたことはあるかと思うのですが。

柴崎副委員長 和光高校は、四年制大学への進学が非常に少ないです。5割は進学ですが、その中でも専門学校がほとんどで、四年制大学はこの春だと10名ちょっとくらいです。その中で、進路指導はかなり就職指導に力を入れた形になっています。

骨子案を拝見していて、基本方針の部分は進学か就職かということはないかと思えます。例えばアに、生徒が卒業後の進路を模索し実現する過程を支援し、将来を見通した進路選択を促すと記載されており、基本方針は進学、就職のどちらかに偏ったものではないと思えます。ただ、具現化のところは、重田委員がおっしゃったような心配がありまして、具現化のアが大原則なのかなと、進路ガイダンスを充実させ、十分な情報提供と指導を実施するとともに、面談を通して個々に応じた指導を行う。当然この中には、多様な進路の可能性があると思うので。アが大原則で、その下にイからオがあるのかなと、少し進学に振れていますが。

重田委員 もし就職ということであれば、もっと具体的に言ったら、いろいろな企業とですね、私の時代ですとホンダだったのですね、側にありましたから。そういう企業との連携とか、職業訓練とか、1日工場見学に行くなど、そういったものがある、就職につながる、そういうものが非常に大事だと思います。我々の頃は、そうしたことがあり、和光の駅前にエンジン工場がかつてあって、今は本社になってしまったが、そこにかかなりの数の就職をしていたという記憶がありますので、そういったものがあったとしても良いのではないかなと思います。

依田委員長 はい。事務局からいかがでしょう。

事務局 最終的に文言を整理する際に検討させていただきたいと思えます。

依田委員長 重田委員よろしいですか。また基本計画の案の段階で各委員から意見をいただく機会がございますので。それでは、他に御意見のある方はいかがでしょうか。羽田委員お願いします。

羽田委員 今のお話を伺っていて、進路について、進学なのか就職かという二項対立的に考えていくより、先ほど委員長のおっしゃったように、一人一人の生徒に相応しい職業観とか、新しい時代に求められる職業観をしっかりと身に付けさせて、具体的に何をしていくのかということとは生徒それぞれの選択があっても良いと思うのですが、例えば就職もしない、進学もしないで海外でボランティア活動しますとか、あるいはもう少し自分で勉強するとか、そういうことがあっても当然良いはずなので。余りここで進学の色、就職の色、というものを強く出し過ぎてしまうと、じゃあもうそれ以外はダメかという発想も出てしまうので。もう少し広く捉えた方が良いのかなと。なぜそう思ったのかというと、この新校には多様性というものがキーワードで付随しているということで。恐らく留学生もいらっしゃるだろうし、次の項目で出てくる入学のところで、外国籍の子供たちとか帰国子女のお子さんとかの入学が想定されると思えます。それがどれくらいの割合になるか分かりませんが、様々な国籍とか、様々な経験を持った子供たちが一緒に学んでいく中で、昭和の日本型の、こういう大学に行って、こういう会社に行く幸せだよ、というモデルは成り立たないと思うので。むしろ、こういうことを今は求められているよということを踏まえて、後は自分が選択する。その選択はしっかりとサポートしていく。そういくことが必要かなと。

依田委員長 はい。ありがとうございます。では、受け止めていただいて。残り生徒募集とその他があるのですが、ここまでを通して、基本理念から、教科指導、生徒

指導、進路指導という、学校でのいわゆる教育内容について、お話を委員の皆様からいただけてきました。まだお話いただけていない委員から、もしここまでの教育内容について御意見があればいただきたいと思います。中川委員、何かございますか。

中川委員 私がお話を聞いていて思ったことが、1番最初のページの基本理念のところで、参考資料1に論点としてあったのですが、目指す学校イのところ、グローバルリーダーを育成する学校とありますが、両校から違う案が出てきていますので、苦慮してこういう形になったのかなと思います。先ほど、羽田委員のおっしゃった多様性という意味では、リーダーだけが育てなければいけないのかなと引っ掛かりました。私自身は、2番手として支えることが得意だと自分では思っていて、リーダーだけではなくて、多様性という意味では、グローバル人材の方が良いのではないかと感じました。そういったところももう少し考慮しても良いのかなと思いました。

依田委員長 グローバルリーダーの意味ですかね。事務局から何かございますか。

事務局 グローバル人材の方が意味としては広いのだと思います。リーダーというところでは、グループや集団を率いていくという意味では、リーダーとフォロワーがいて良い方向に進むのだと思いますが、そういったことをまとめるとやはりグローバル人材という表現でも良いと言えなくもないのかなと思いました。確かにそれぞれの高校から出された言葉が少し違うということについては、新校基本計画検討委員会でも意見がありましたし、どちらが良いのかという意見は確かにありましたし、事務局として検討させていただきたいと思います。

依田委員長 多様性というキーワードがありますので、余りリーダーが出過ぎると誤解が生じる可能性があるかなという気はしますね。では、辻委員いかがですか。

辻委員 いろいろな御意見をきかせていただきありがとうございます。率直に、再編統合は難しいなと感じた次第です。勉強になりました。その中で自分の立場とすると、3月まで広沢小学校の校長として、本当に身近なところに国際高校があるという観点から、是非、新校ということで、なかなか県立の学校と市町村立の学校の違いですとか、通う生徒は和光市の子供たちだけではありませんが、何か地域の市町村立の小中学校と連携したいなと思います。国際科の話の中に、グローバルとローカルを合わせたグローカルという言葉もありますが、そういうところで、これから地域とつながっていただくことを期待していたところです。

依田委員長 はい。ありがとうございます。地域連携ですね。事務局はいかがですか。

事務局 県立高校から見て、地域とは、その意味が難しいのですが、いわゆる関係の皆さん、ステークホルダーの皆さんの中には、小・中学生やその保護者も当然含まれるものと考えています。この後の、生徒募集の項目にも記載しているのですが、是非そういった皆様新しい学校を理解していただき、連携も深めていければと考えています。

依田委員長 山口委員はここまでいかがですか。よろしいですか。布川委員はいかがですか。

布川委員 和光高校と和光国際高校の統合ということで理解はしてはいるのですが、やはり和光高校に関係する人たちからすると、利用される校舎が和光国際高校の場所になるということと、国際や国際交流をメインテーマとして学校を作っていくということを踏まえると、和光国際高校の指導がベースにやっていくのかなという印象を持ってしまう方が少なからずいるので。これから新しい高校の生徒募集をしていく際に、和光国際高校の色がすごく出ている印象にならないように、例えば、和光高校の生徒と先生の距離が近い教育をやっているとか、2つの高校の良さをちゃんとアピールしてもらえそうな募集の仕方をしてもらえると良いなと個人的には思いました。

依田委員長 はい。ありがとうございます。今、生徒募集の関連のお話がありましたので、ここで生徒募集の説明まで進めた上で、布川委員の意見について、事務局からの考え方を求めたいと思います。それでは、委員の皆様は、5ページに進んでいただければと思います。生徒募集についてです。こちらについて、まず事務局から説明をお願いします。

事務局 (和光新校基本計画骨子(案)のうち生徒募集、その他について説明)

依田委員長 それでは、布川委員からいただきました、生徒募集の際に和光高校の特徴である生徒と教員との関係、近い関係であるとか、和光高校の良い部分を生徒募集で出せないかということについて、事務局から考え方はありますか。

事務局 私たちも、この統合をさせていただき当初の段階から、和光高校の良いところをしっかりと、レガシーを新校に継承させていくべきとお話をさせていただきまして、そういった基本的な考え方が底流にあることは御理解いただければと思います。ここに今、基本計画の骨子案として本日お示しさせていただいているところは、この後で文言化をしていくのですが、割と教育委員会の中で使われるような言葉を中心にまとめているところもありますし、実際に生徒募集活動を行っていく対象は中学生やその保護者がメインとなりますので、分かりやすい表現で、いろいろな媒体を使って、広報していく必要があると考えています。別の委員会の中には、マンガみたいなものを使って表現しても良いのではないかというアイデアも出ていますが、いろいろな媒体を使って広報が出来れば良いなと考えておりますので、そうしたところに、和光高校の良いところを。和光高校の良いところは、前にもお話しさせていただきましたが、生徒に寄り添う伴走型の学びの伝統があることや、また、和光高校もコロナ前には、和光市が姉妹都市を結んでいるロングビュー市との国際交流に参加している学校なので、そういう意味でも、国際というところは、和光高校ともつながりがあると考えているところです。いろいろな良いところをうまく表現していければと思います。

依田委員長 布川委員いかがでしょうか。よろしいですか。では、生徒募集ということなので、大和中の佐藤委員から一言いかがでしょうか。

佐藤委員 はい。市内に中学校は3校あるのですが、和光高校は、言い方が難しいのですが、理解するのに時間はかかったとしても、真面目にやっている子供たちが通い、少人数指導で丁寧に教えてもらい伸ばしてもらっている子が多くいるというこ

とで認識しています。私も4月から現場に戻ったのですが、現場の3年生や保護者の声としては、そういった部分で、地域とのつながりがなくなってしまうのが残念だとの声を直に聴いています。その中で、やはり、先ほどから委員がおっしゃるように、新校は和光国際高校寄りに行くのではないかなという意識が強いという実感があります。その辺りは新校ということなので、両校の良さを出しながら周知していただきたいなというのが、子供に対しても強く感じているところです。

依田委員長 はい。ありがとうございます。佐藤委員、その他、中学生や保護者の方も含めて、今の生徒募集について、もっと良くなる方法というか、こうすればもっと中学生から高校が理解されるのではないかと、何か中学校側として、この際、我々にアドバイスいただけることはありますでしょうか。

佐藤委員 はい。具現化のイを見させていただいて、近隣の小・中学校と連携し、学校の特色を生かした取組を行う、という部分が、実は、和光高校とは生徒指導上の決まりの件でいろいろお話をさせていただき、和光国際高校とは先日中学生の学習支援で、30人くらいに来ていただくという取組を今年初めてやらせていただきました。そういった意味では、先ほど辻委員からもお話がありましたが、小学校とも連携していただいているので、そういう地域との連携の取組を広くやっていただくことが、中学生や保護者にとってもすごく良いと感じているので、具現化イの視点は是非大事にさせていただきたいなと思っています。

依田委員長 ありがとうございます。大変参考になります。では、5ページ含めて、1ページから5ページまでの全体で結構です。委員の皆様から御意見があればいただければと思います。では、羽田委員お願いします。

羽田委員 入学者選抜に関してですが、新校で様々なバックグラウンドを持った生徒を募集していくということであれば、帰国子女や外国籍の子供たちも当然対象になるということで、そうなったときに、今までの一律にやっている県の入試制度では、なかなか拾うことができない。意欲があっても新校で学びたいと思っても、例えば日本語がまだ十分でなかったりする。そのため、入学者選抜の方法については、特例というのも変な話ですけど、新校に向けて、それに合った形を探っていく必要があるのではないかなと。そうしないと、入りたいのに入れられない地域の人たちがたくさん出てきてしまうのではないかと。先ほど校長からもありましたが、近くに理化学研究所もありますし、東京にも近いという地域的なことも考えれば、あるいは、またもともとこちらに住んでいる外国人の方のことを考えれば、当然そういう人たちが多く入学してくる学校でも良いし、それがまた一つの特徴になるのかなと思っています。多様化が進むと、どうしても一斉・一律の指導に効果がなくなる。先程来お話の出ている和光高校が大事にしてきた個別最適な指導が必要になってくるし、探究活動でグローバル課題を掘り下げていくにしても、グループであれ個人の研究であれ、それぞれテーマが異なりますから、教室で一斉に講義をやって済むという探究の時間ではなくなるはずで、そうすると大学がやっているゼミみたいな形を、どういう風にするかは別にして、個別指導のような時間をしっかりと確保していかなければならない。そうすると、当然、生徒一人一人に教員が寄り添ってそ

の生徒に一番合ったような指導をしていくという、そういうシステムというかやり方が必然的に求められてくるので、そういうものを一つのストーリーとしてアピールしていけば、いろいろな背景がある生徒がいて、先生もすごく丁寧に教えてくれて、最終的にそれぞれの希望に叶った進路を実現させてくれる、しかもグローバルという基本理念がある中でという絵が見えてくるのではないかなと思います。

依田委員長 はい。入試の関係も含めて事務局からありますか。

事務局 この地域が、理化学研究所があったりして外国につながる生徒たちが多くいるということは前々から聞いております。その高校生くらいの年代の生徒たちが、どこに行っているのかというと、近くの高校に在籍していなくて、恐らくは所沢辺りのインターナショナルスクールなどに行ってしまうという話も伺っております。そういった子たちを新しい学校に呼び込むのであれば、入試制度をある程度いじる必要があるのだろうとは認識しているところです。私どもの課は入試制度をコントロールできていないので、教育局内で更に検討していく必要があると考えておりますけれども、一方で、入試というのは公平性を担保する観点から埼玉県内では一律に、市立の高校を含め同じルールでやっています。羽田委員からは特例的な位置付けを模索できないかとのお話をいただいておりますが、何か工夫ができれば、そういったところも進めていきたいと思っています。外国にルーツがある生徒が多くなっている現状が県内のいろいろな学校で起きていることなので、この新校に限った話ではないかもしれませんが、教育局で更なる研究を進めていきたいと思っております。

依田委員長 はい。よろしいでしょうか。他はいかがでしょう。重田委員お願いします。

重田委員 学校規模が、普通科6クラス、国際科2クラスとなっておりますが、これで入学したら動けないのですか。今のお話にあったように、それ以外の学科を作ったら良いのではないのでしょうか。そういう子供たちを集めるような、普通科以外にももう一つ何か新しい科を作るとか。それから、入試制度の難しさはありますけれど、推薦枠というのは作れないのでしょうか。個別指導が重要というところで、そういう子供たちを集めても良いのではないかなと。大きい私立高校を見ると、野球が好きな学校は、学力的に厳しくても入れるけど、学力が非常に高い生徒もいるし、それで良いではないですか。そういう学校であるべきではないのかと私は思いますけれども。このままでは先ほども言ったように、結局最後は和光国際高校になってしまうのではないのでしょうか。ただ今おっしゃったような子供たちを集める学科があっても良いのではないかなと。その方が余程、国際的じゃないかなと。今の和光高校にも横文字が付く生徒は3割以上いますよね。卒業式を見ても、和光国際高校かと思うくらい国際的な学校なのですよね。そういう子供たちが入学してきて良いのではないかなと。そういう学科があっても良いのではないかなと思います。

依田委員長 そういう枠をできるかどうかということも含めて、事務局で検討していただければと思いますね。これは検討ということで良いですか。

事務局 1点目だけ。ちょっとお答えを。入試制度については、いろいろな考え方が

教育局内でもありますし、推薦入試はかつて埼玉県でも行っていた制度ではあるのですが、現在はありません。そういったところも含めて、先ほども申し上げたのですが、教育局内でも研究をしている段階です。重田委員からいただいた1点目の、一度入ったら変えられないのか。その部分については、通常のケースだとなかなか変えるのは難しいです。どうしてかという、それぞれの学科には教育課程があり、1年生、2年生、3年生の3年間で高校卒業には74単位以上の修得というのが必要なのですが、このうちの25単位以上は、例えば国際に関する学科の場合、そういった専門の科目を修得しなければならないのです。ですので、卒業までに途中から変更できて、25単位以上を修得できれば理論上は可能ですが、なかなか実際の学校生活は1時間目から6時間目、多くても7時間目くらいまでしかコマ数がない中では、なかなか難しいというのが実際のところですよ。ですから、普通科で入った生徒は普通科で卒業、国際に関する学科で入った生徒は国際に関する学科で卒業していくというのが一般的です。

依田委員長 重田委員、よろしいでしょうか。

重田委員 それに関しては分かりました。それに関しては。

依田委員長 時間が迫ってまいりましたが、どうしてもここで更にという委員がいらっしゃれば承りたいと思いますが。

鈴木副委員長 入試に関しては、私も、多様性を育むには多様な生徒集団の中で育つことが一番で、日本人しかいない中で多様性と教科書で学んでも実感がないと、実感させることが大事だと前々から思っています。やっぱり、都立国際高校のように3～4回細かく入試を分けて、30%近くを外国人か帰国生徒が占めています。それが理想だなと思いますが、都立国際と同じようにはいかないまでも、特別な選抜でそういった地元や県内の外国にルーツのある生徒が入ってくれば良いなと思っています。以前、辻委員と和光第二中学校の学校評議員として御一緒したときに、理化学研究所については門戸を開ければ変わると思うよと、そんな話を聞きました。そんなことができれば素晴らしいなと思っています。これは県教育局がやってくれないとできないことですので、是非お願いしたいと思っています。

依田委員長 はい。それでは、ちょうど時間になったところです。これで今日の協議は終了いたします。